

平成30年6月9日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380341

研究課題名(和文) 途上国における経済発展と多面的貧困形態の変容に関する実証研究

研究課題名(英文) Multidimensional poverty and economic development in developing countries

研究代表者

上山 美香 (Ueyama, Mika)

龍谷大学・経済学部・准教授

研究者番号：90635640

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、所得(消費)貧困が最も深刻な地域である南アジアとサブサハラ・アフリカの比較を中心に、教育や健康状態、ジェンダー格差など多面的な貧困形態の特徴、経済発展のプロセスに伴う貧困形態の変化について分析した。

この10年で、最貧国を含む多くの国・地域において、予防接種等接種率、就学率など教育、保健分野のアウトプット指標が急速に改善したが、所得水準との強い相関関係は見られず、MDGs達成に向けた国際的な取り組みの成果といえる。意識・行動の変化が必要なジェンダー格差、学業成績、健康状態といったアウトカム指標の改善には、より長期的な視点が重要である。

研究成果の概要(英文)：This study examined the multifaceted characteristics of poverty such as income (consumption), education, health condition and gender differences, in developing countries. The study mainly focused on South Asia and Sub-Saharan Africa where income (consumption) poverty was the most serious. This study also investigated how the characteristics of poverty changed with the process of the economic development.

In recent ten years, education and health output measures such as school enrollment and immunization rates were improved rapidly in many developing countries including the LDC. These improvement caused mainly by the international actions for the MDGs achievement. The tendency of such improvement is not strongly correlated with the process of economic development. We need a longer-term viewpoint for the improvement of health and education outcome and gender discrimination.

研究分野：開発経済学

キーワード：貧困 途上国 サブサハラ・アフリカ 南アジア ジェンダー 教育 保健 MDGs

1. 研究開始当初の背景

途上国の貧困を巡る研究は、アマルティア・センのケイパビリティアプローチなど「貧困」概念の広がり、経済学の枠組みによる所得（消費）以外の諸側面に関する分析の進展など、学術面において多くの新しい展開を迎えている。開発政策においても、包括的な貧困削減を掲げたミレニアム開発目標（MDGs）の達成期限を2015年に控え、所得貧困のみならず教育や保健、ジェンダーといった多面的な貧困問題を解決すべく、さまざまな取り組みが行われている。また、2012年の世界開発報告は『ジェンダーの平等と開発』と題し、開発ミクロ計量経済学的手法を用いた実証研究から得られた学術的エビデンスを多用し、途上国の効率的な経済社会発展にとってジェンダー平等が重要であり、経済合理性があることを示した。従来、ジェンダーと開発の議論は、人権問題として格差是正にとどまるものが多かったが、経済学理論に裏付けられたジェンダー分析のさらなる蓄積が重要視されている。

このような国際的な学術潮流の中、研究代表者はこれまで多面的貧困の地域比較を行ない、最貧困地域として一括りに論じられがちなサブサハラ・アフリカと南アジアでは、特に子供の健康状態やジェンダー格差に関する貧困状況に大きな違いがあることを明らかにしてきた。

これらの結果から導き出される新たな研究課題が、貧困形態の地域的特徴は地域固有の不変なものではなく、経済発展や社会環境の変化とともに変化しているが、そのプロセスや特徴は学術的に体系立てて証明されていないということである。貧困の特徴を動学的に把握し、その特徴を浮き彫りにすることが、国際社会における貧困撲滅を目指す今日の研究課題として求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、各種ミクロ、マクロデータ（クロスカントリーパネルデータ、各国における家計調査等の個票データ）を用いた計量分析により、所得側面のみならず、教育や健康状態、各種サービスへのアクセス、ジェンダー格差といった多面的な貧困形態に対して、各途上国・地域の特徴を浮き彫りにし、類型化することである。特に、ここ四半世紀で、各地域における貧困の形態がどのように変容してきたのかを丁寧に検証し、その傾向を把握するとともに、各国・地域における経済発展や社会環境の変化が貧困の各側面に与えた影響を分析し、経済発展と貧困の関連性をより詳細に類型化することにある。

途上国の貧困問題は、この四半世紀、国際開発政策の第一課題であり続けるが、2000年初頭以降、MDGs達成に向けた貧困削減への国際支援の加速や、東アジアを中心とする急速な経済成長などの要因により、世界全体で見れば途上国の「貧困」は大幅に改善され、各国・地域が抱える貧困課題にも多様性が見られるようになってきた。所得のみならず多方面の貧困課題を含めても、1990年代と今とでは、世界の「貧困マップ」は大きく異なることが予想される。つまり、ある国・地域が国際開発政策上「最貧」とされ続けたとしても、その性質や問題点、解決のための課題は大きく異なるのである。したがって、「貧困」の中身をしっかりと把握し、その変遷過程を丁寧に追うことが重要となる。

一つの国、地域および時点に研究対象を限定せず、多国間、複数時点を対象として途上国の貧困問題と経済発展の関連性を比較検討することで、途上国全体の現時点における多面的貧困形態の特徴を明らかにするのみならず、過去から遡って、各途上国・地域における貧困の状況・形態がどのように変化してきたのかを包括的に整理し類型化することで、今日における途上国の貧困形態の特徴、

新たな課題を明確にする。

3. 研究の方法

□ 関連文献、研究成果のレビュー（先行研究の整理）

2015年のMDGs達成に向けて、学術研究の成果が数多く出てくるため、それらの研究内容を丁寧に分析・整理することで、各途上国・地域におけるMDGs各目標の達成にむけた進捗状態、問題点、MDGs対象外の諸側面を含めた近年の貧困傾向の把握、新たな課題の抽出に努める。

□ 統計データによる途上国における貧困形態の国別・地域別特徴の分析、類型化

World Development Indicatorsなどのクロスカントリーパネルデータ、Demographic and Health Survey (DHS)、Multiple Indicator Cluster Surveys (MICS)、Living Standard and Measurement Study (LSMS) など各国の家計調査を用いて、マクロ、ミクロの両側面から途上国の貧困と経済発展、国際支援の関連性について実証分析する。国別マクロデータのみならず、個人の個票データまで遡り、さまざまな変数を作成・比較することで貧困の多面性を分析し、類型化する。また、クロスカントリーパネルデータを用いた成長回帰分析、開発ミクロ計量分析による多国間比較を用い全体像を把握し、昨今のMDGsやSDGsをめぐる国際開発支援や経済成長、その他要因と貧困の各側面との関連性を実証分析する。

4. 研究成果

本研究の目的は、さまざまな統計データを用い、所得(消費)貧困のみならず教育や健康状態、国・地域内での格差やジェンダー格差

など多面的な貧困の特徴を比較検討、整理し、途上国における貧困形態の特徴を明らかにすることである。特に、一人当たりGNIを基準にする所得貧困が最も深刻な地域として、一括りに議論されがちな南アジアとサブサハラ・アフリカ諸国に関して、その詳細な比較分析を行なうとともに、一時点における貧困の特徴のみならず、経済発展のプロセスに伴い、貧困の諸形態がどのように変化していくのか、その地域的特徴に着目する。

関連文献、先行研究のレビュー、および入手可能な統計データを遡り、各国・地域の貧困状況の特徴を整理した結果、教育や健康状態、各種保健サービスへのアクセスといった所得以外の多面的な貧困概念に関して、多くの国で急速な改善が見られることが明らかとなった。2015年のMDGs達成期限に向けた国際社会をあげての多くの取り組みにより、最貧国と位置づけられ、開発上の多くの問題を抱える国も含めた大部分の国・地域において、この10年間で急速に予防接種等接種率、就学率などの教育、保健分野のアウトプット指標に大幅な改善がみられることが明らかとなった。

とはいえ、これらの指標の改善は一概には所得水準の上昇と連動しているとはいえ、経済発展の結果というよりも、国際社会全体での取り組みの成果といえる。ただし、これらの成果は特に、供給面での制約が大きな課題であるケース(たとえば、学校の設置、教科書の配布、ワクチンの増産などで対応できるもの)については、その押上に効果があることが示されたが、より複合的な要素をはらむ学業成績、健康状態といったアウトカム指標、人々の意識・行動の変化が必要なジェンダー格差の解消といった点については、その効果の幅が小さく、より長期的な視点に立つて解決策を見出していく必要が示された。

今後の研究課題として、本研究で明らかになった各国・地域における貧困形態の推移・

特徴をふまえ、1990年、2000年、現在の3時点を中心に、包括的貧困形態の地域別特徴を示す「貧困マップ(見取り図)」を作成し、各地域の貧困の特徴、貧困問題の核心がどのように変化してきたのかを整理したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

上山美香 (2018) 「経済発展と子供の人的資本に関するジェンダーバイアス：南アジアを中心とした四半世紀の動向」『経済志林』第85巻、第4号、p.355-379

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計1件)

岡部恭宜(編著)(2018)『青年海外協力隊は何をもたらしたか 開発協力とグローバル人材育成50年の成果』(佐藤峰・上山美香「めげずに頑張りが続ける力はどこから来るのか」p. 215-235) ミネルヴァ書房、322ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

上山 美香 (Ueyama, Mika)
龍谷大学・経済学部・准教授

研究者番号：90635640

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()